

第 章 分析と考察

遺構

環状列石

環状列石は、中央帯列石・内帯列石・外帯列石の三重の環状列石、外帯列石の外を巡る弧状列石、外帯から分岐する直線状列石、そして内・外帯列石周囲に配置された特殊組石遺構から構成される。特に、内・外帯列石は四方が突出する環状を呈しているため、環状というよりは方形に近い形態といえる。

規模は、内帯列石で最大径29m、外帯列石で35mを計り、秋田県鹿角市に所在する大湯環状列石（野中堂環状列石・外帯径42m、万座環状列石・外帯径48m）に比べ小型であるものの、仮に弧状列石が全周すれば径44～45mになるものと推定され、ほぼ同規模のものとなる。ただし、弧状列石を全周させるつもりで構築し、何らかの理由で中断したか、または検出した列石部分で完成されたものかは不明である。

構築時期に関しては、周囲から縄文時代後期初頭の住居跡と同時期の遺物及び前葉の遺物が出土しているが、内・外帯列石間の埋設土器、環状列石周辺の遺物出土状況及び縄文時代後期前葉の捨て場である第2号遺物集中ブロックの礫群の検出から考え、縄文時代後期前葉で間違いのないであろう。構築期間は、組石の統一性及び単一形式の出土遺物から推定すると何世代にもわたって構築されたとは考えにくく、大規模な土地造成にもかかわらず短期間に構築された可能性がある。

環状列石の特徴として第1に内・外帯列石の配石方法が挙げられる。環状列石の一般的な形態は、配石遺構の集合体であるが、本遺跡の縦石と横石の連続による配石方法による環状列石は他に類例がなく、本遺跡特有の配石形態と推定したが、平成7年に秋田県鷹巣町伊勢堂岱遺跡から本遺跡の配石方法と類似した配石部分を有する環状列石が検出された。このことは、本遺跡の配石形態は特異なものではなく、定型的な配石方法である可能性があることを示唆し、今後、同様の配石方法による環状列石を含む配石遺構が検出されるものと思われる。また、内・外帯列石は東側（谷側）を向くように並べられ、環状列石中央から概観するよりは、レベルの低い東側から概観すると全体の形状が認識できる特異性を有しており、環状列石は「見せる」ということをかなり意識して構築されたのではないだろうか。

特殊組石遺構は、中央帯を中心に相対する位置に構築されている傾向があり、また内・外帯列石の突出部にも構築されていることから、特殊組石遺構は決められた場所に配されたものと推定される。この相対する特殊組石遺構を結ぶラインが重要な意味をもっているものと思われる。特殊組石遺構の下部調査を行っていないため特殊組石遺構自体の性格は不明である。また、特殊組石遺構同様に、外帯列石と弧状列石から分岐する直線状列石も同様な意味をもつものではないだろうか。

第2の特徴としては、大規模な土地造成が行われていることである。環状列石は台地縁辺部の斜面上に構築されているが、環状列石構築前に、切土、盛土を行い斜面を平坦にするという大規模な土地造成を行っている。環状列石は一般的には平坦な面に構築されるのが通例である。土地造成を伴う環状列石としては、岩手県一戸町に所在する御所野遺跡と北海道函館市石倉貝塚がある。前者の環状列石は縄文時代中期後半の産物であるが、構築前に土地を削平し、環状列石をその面に構築している。さらに、削平の際の排土は、多量の遺物とともに環状列石を弧状に囲むように積み重ねられている。また後者の環状列石は、北海道に見られる環状土籬のように環状に盛土を行い、その盛土内に環状列石を構築している。盛土内は御所野遺跡同様、多量の遺物が含まれている。この2例の環状列石に係る土地造成は、削

平した面に配石を施すという点では本遺跡の土地造成に類似するものの、盛土に関しては性格が異なり、この2例の盛土は多量の遺物や焼土などを含み、捨て場もしくは祭祀的な様相を呈するものであり、本遺跡の場合は単に環状列石の土台として行われた可能性が高い。周囲には平坦な面が存在するにもかかわらず、斜面を平坦にするという大規模な整地を行ってまでこの地に環状列石を構築したことは、この場所でなければならない理由が存在したと考えられる。

第3には内・外帯列石間から3個の甕棺と思われる埋設土器が出土したことである。環状列石内から甕棺と推定される土器が出土したことは、環状列石の性格を具体的に示すものと言える。大湯環状列石では環状列石周辺からは甕棺と思われる土器が出土しているが、環状列石自体は配石墓という埋葬形態をとっているのに対し、本遺跡の環状列石内では甕棺土器による埋葬形態をとっていることは、その地域で主に行われていた埋葬風習を表しているものではないだろうか。

環状列石は、縄文時代中期後半から見られる集団墓の成立、円環思想に基づく墓域・広場を中心とした環状集落、墓標としての配石遺構の出現の三つの要素から誕生したと考えられる。つまり、環状列石は墓地として生まれたこととなり、そして、後期前半にそのピークを迎え、大湯環状列石、本遺跡の環状列石などが構築される。

環状列石は配石墓の集合体である大湯型の他に、本遺跡が代表する小牧野型が出現する。前者は配石墓が時間の経過の中で環状に並んだ、「結果の環状列石（環状配石墓群）」であり、後者は円形空間を作り出すため短期間に石を並べた、「計画の環状列石」である。大湯型、小牧野型ともに円形広場内に埋葬するという集落内の規制が存在し、その円形広場を明確に区画したものが小牧野型であると言える。円形空間を区画するという点では、時期は若干異なるものの北海道忍路環状列石や地鎮山環状列石（環状石籬）に近いものがある。

しかしながら、両者とも根底に流れているものは「共同墓地」であろうが、大湯型と小牧野型は、環状列石の性格に違いが存在するものとする。大湯型は円形広場全体が純粋な墓域として存在するが、小牧野環状列石は、環状列石で区画された円形広場が、埋葬行為に当然付随する葬送儀礼を行う場、もしくは強い規制が敷かれた聖域として存在し、墓域は、一次埋葬域を外帯周辺のフラスコ状土坑などとし、二次埋葬域（再葬域）を内帯と外帯の間に設定したものと推定する。また、環状列石周辺から、三角形岩版や円形岩版等の祭祀的要素の強い遺物が多量に出土していることから、祭祀の場としても考えられる。

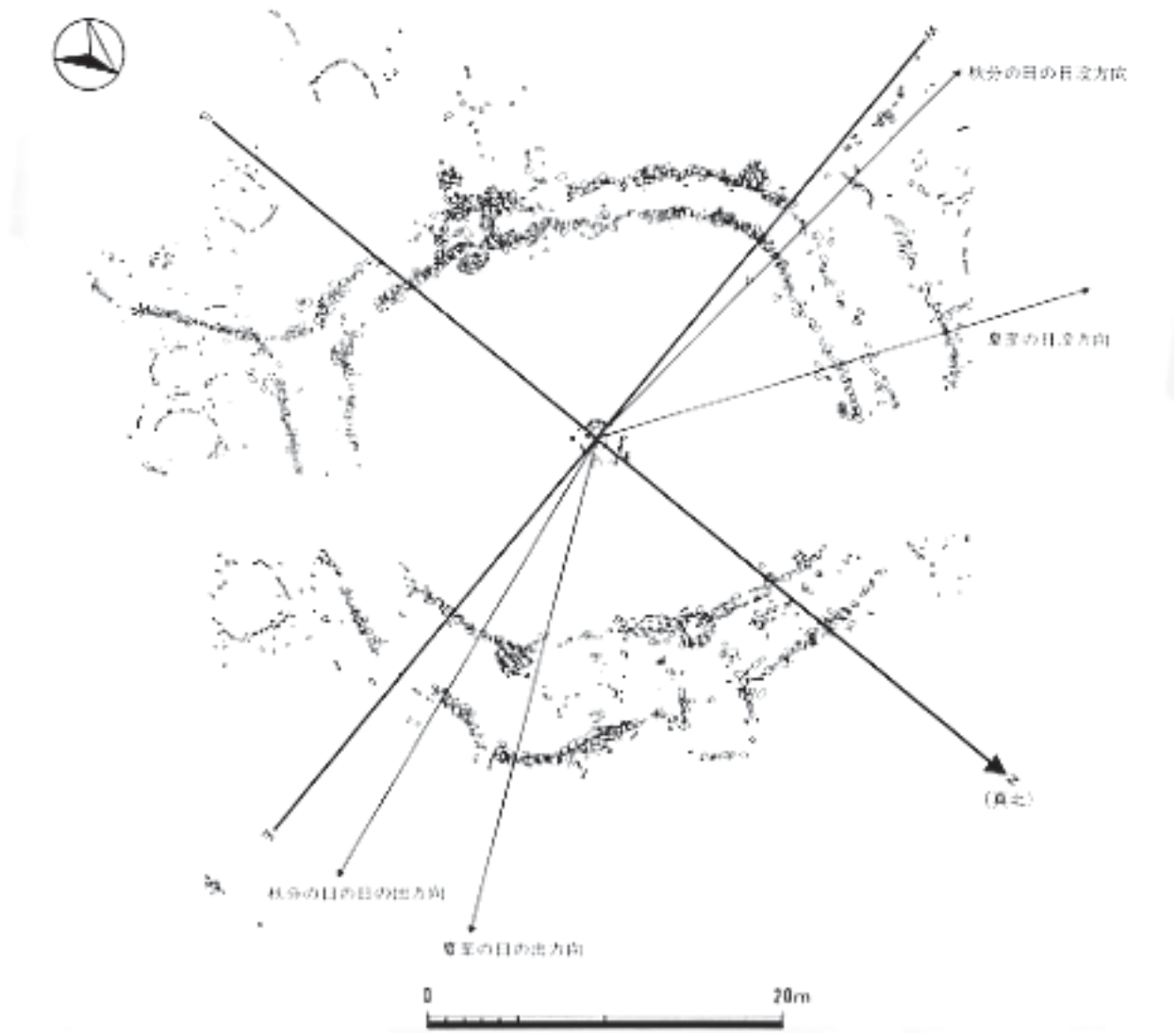
夏至、秋分の日との関連

最近、縄文人の天体観測について2例の報告があった。径165mにも及ぶ環状盛土遺構が見つかった栃木県小山市寺野東遺跡と大湯環状列石からである。

前者は、遺跡内の石敷き台状遺構と筑波山の山頂の線上に冬至の日の出が見えるという報告であり、後者は、二つの環状列石の中心と列石内にそれぞれある日時計状組石を結ぶ線上に夏至の日没が見えるという報告である。

第121図は、小牧野遺跡環状列石中心帯からの目視による夏至（平成7年6月22日）・秋分の日（同年9月21日）の日没、日の出の方向である。ただし、日の出に関しては、東側が林地であるため日の出の確認が困難であり、若干のずれがある。

夏至では、弧状列石から東側に延びる直線状の列石付近に日が沈み、第9号特殊組石遺構北よりに日



第 121 図 夏至と秋分の日太陽との因果関係

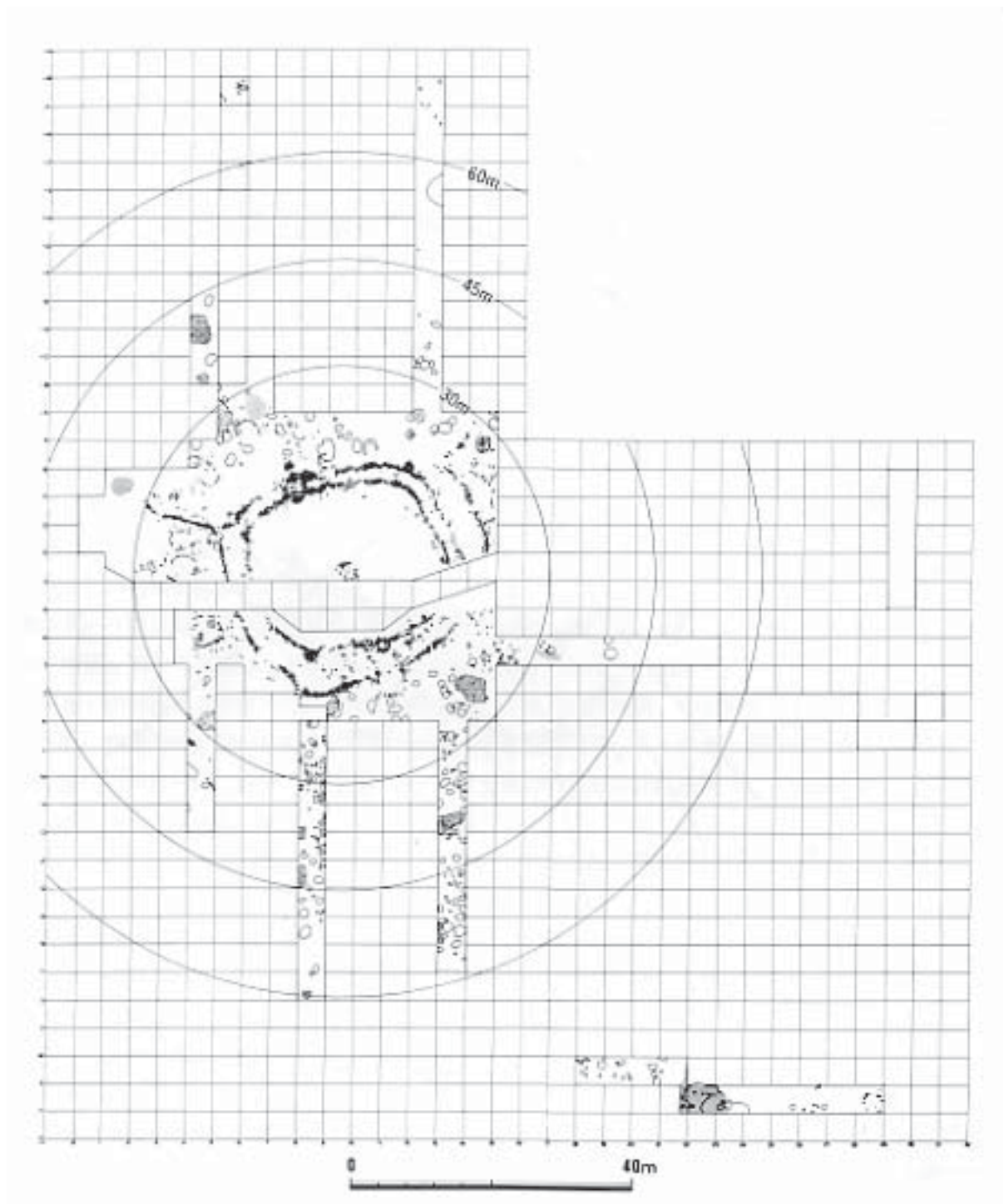
が上り、秋分の日では、弧状列石西側の直線部付近に日が沈み、第 9 号特殊組石遺構南よりに日が上るという観測結果を得た。

遺構配置

本遺跡の調査は、環状列石を中心とした遺跡の広がりの確認を主眼に行ったため、トレンチによる調査を主体とした。この限られた調査結果から環状列石を中心に周辺の遺構配置を考えてみたい。

これまでの調査では、竪穴式住居跡 3 軒、配石遺構 17 基、集石遺構 1 基、土坑 152 基、埋設土器遺構 3 基、遺物集中ブロック 4 箇所、その他、小ピット、焼土遺構、溝状遺構が検出された。これらのうち竪穴式住居跡と第 1、3、4 号遺物集中ブロックは環状列石と時期が異なるため外して考える。

環状列石の周囲には配石遺構が位置する。配石遺構は大きく二つに分けられ、一つは環状列石南側から西側にかけ環状列石を囲むように検出された径 2 ～ 3m 前後の方形または円形の配石遺構と外帯列石



第 122 図 環状列石と遺構の関係

から 15m 以上離れた場所に位置する直線状のものを主とする配石遺構である。前者の配石遺構の内部は堅緻に踏み固められたものであり、この配石遺構内で何らかの行為を行っていたことが推察される。また、北側に約 90m 離れた地点からも形状が類似する配石遺構を検出したが、同様に内部が踏み固められていた。これらの配石遺構の構築時期は、配石内部の出土遺物から縄文時代後期前葉のものと推定され、その配置からも微妙な新旧関係は把握できないものの、環状列石と同時に存在していたと思われる。後者の配石遺構の中には内・外帯列石と同様の配石方法を用いたものがあるが、内・外帯列石との関連は

明らかではない。構築時期は、前者同様縄文時代後期前葉のものと思われる。

外帯列石から 10m 以内には、大型の円筒形もしくはフラスコ形の土坑が位置する。位置により土坑の形態が異なり、南西側（山側）には円筒形のものが、北東側にはフラスコ形のものが主体を占める。

円筒形を呈する土坑の中には大型の柱穴跡が含まれているが、限られた調査範囲のため柱穴列を確定できるものはない。大湯環状列石では環状列石周辺からは多数の掘立柱建物跡の柱穴跡が検出されているが、本遺跡では柱穴は極めて少なく、仮に建物跡が存在したとしてもほんの数軒のものではないだろうか。また、大湯環状列石の掘立柱建物跡と本遺跡の方形・円形の配石遺構が位置的に同じであることから何らかの関連があるものと思われる。

北東側に位置するフラスコ形を呈する第 128 号土坑は、床面壁際に多量の礫群が置かれ、副葬品と思われる切断土器や石皿（この石皿については本章土製品・石製品の項で後述する。）が出土したこと、土壌分析の結果などから考えると墓の可能性が極めて高く、また、同じフラスコ形土坑である第 131 号土坑の土壌分析も同様の分析結果を得たことから、北東側に位置するフラスコ形土坑群は墓の可能性が極めて高いと言える。

円筒形やフラスコ形の土坑の外側には径 80 ～ 100cm の楕円形を主とした土坑が位置する。ただし、南西側、南側、北東側では土坑の分布状況が異なり、南西側では分布が希薄で、外帯列石から 20m 以上離れたところからは土坑がほとんど検出されず、また南側では前述した大型のものを含め土坑は 1 基確認したのみであるのに対し、北東側ではかなり密に土坑が分布し、北東側の調査区全域から土坑が検出されている。さらに、北東側の土坑群にもブロックがあり、外帯列石から 15 ～ 20m の間に土坑群が存在し、その外側に 10m 程の希薄な空間を間に挟み、前段の土坑群より一回り土坑の規模の大きい土坑群が位置している。土坑は切り合いがほとんど無く、棒状の礫が 1、2 個配され、土坑内からは遺物はほとんど出土しないという特徴をもつ。また、楕円形の底面がしっかりした土坑の長軸方向にはまとまりがあり、N - 30 ～ 40 ° - W、N - 60 ～ 70 ° - W、N - 50 ～ 60 ° - E 方向に長軸方向が集中している。

遺物の出土状況を土坑の分布状況に重ねると、土坑の密度が濃い場所は遺物量が多く、希薄な場所は少ないという傾向を見せる。特に Q ～ S - 8 グリッドから多量の遺物が出土したが、同時期の捨て場である第 2 号遺物集中ブロックとは異なる出土状況を呈し、廃棄したというよりは散布したという出土状況であった。

外帯列石からおよそ 70m ほど離れた調査区からは土坑群と柱穴状を呈するピット群が検出されたが、このピット群付近はローム面が非常に堅くしまっており、ローム直上から遺物が出土することから、住居等の建物跡の可能性が極めて高く、柱穴状の小ピット群の数基はこれに伴うものと考えられる。さらにその北側には環状列石構築期の捨て場が位置している。

一般に環状列石周辺の遺構配置は、環状列石を中心に同心円状に広がりを見せるものであるが、本遺跡の遺構配置は、南西側、南側、北東側でそれぞれ異なり、円形、方形を呈する配石遺構は南～南西側に見られ、土坑は北東側に集中している。つまり本遺跡の環状列石周辺の遺構配置は環状にはならないということである。これは環状列石の性格の違いから生じるものなのか、または環状列石の立地に関係するののかは明らかにできないが、環状列石が東側を向くように構築されたことに関連するのではないだろうか。

居住域に関しては、環状列石構築時期の住居跡は未発見であり、不明である。縄文時代後期前葉の大規模な集落としては、青森県大石平遺跡・上尾駁(2)遺跡など挙げられるが、それぞれに環状に配された

土坑群・柱穴群が検出されている。その居住域はそれらから数10m離れた平坦面から緩やかな斜面に変わる場所に、ブロック状に存在する。御所野遺跡では、環状列石を囲むように掘立柱建物跡が並び、その外側に大規模な居住域が馬蹄形に巡る遺構配置が確認され、大湯環状列石（万座環状列石）では御所野遺跡同様に環状列石を囲むように掘立柱建物跡が位置し、その外側にはフラスコ状土坑等が規則的に分布している。ただし、住居跡は150m離れた台地の縁辺部から検出されているものの、環状列石に見合うだけの居住域は見つかっていない。また、岩手県滝沢村に位置する湯舟沢遺跡では、環状列石周辺から住居跡は検出されていない。このように、縄文時代中期後半の大規模な集落では、一般に集落内に墓域を取り込んだ集落構造となるのに対し、後期前葉になると、環状列石・組石棺墓といった墓域は集落から独立した場所に作られ、ブロック的な集落構造に変化すると考えられ、本遺跡も同様の形態をなしているのか、今後の調査により明らかにしていきたい。

（上野 隆博）